

Title	平等主義規範と男性役割規範が同性愛者に対する偏見に与える影響：正当化・抑制モデルの検討
Author	安達, 菜穂子 / 池上, 知子
Citation	人文研究. 67 卷, p.59-84.
Issue Date	2016-03
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科
Description	湯浅恭正教授：美濃正教授退任記念

Placed on: Osaka City University Repository

平等主義規範と男性役割規範が同性愛者に対する偏見に 与える影響—正当化・抑制モデルの検討—

安 達 菜穂子 ・ 池 上 知 子

本研究では、偏見の正当化・抑制モデル（以下、正当化・抑制モデル）を用いて、異性愛者の男女が同性愛者に対してどのように偏見を表出するのか、その心的過程について検討した。このモデルでは、人は自身の潜在的偏見をまず抑制するが、その抑制効果は次に生起する正当化の過程でさらに調整され、顕在的偏見として表出されるとした。抑制要因はこれまで偏見の緩和要因とされてきた要因、正当化要因は偏見の促進要因とされてきた要因であると定義づけられていたため、本研究では、抑制要因として平等主義、正当化要因として男性役割規範を用いて、同性愛者に対する潜在的偏見に対するこの2要因による調整効果について検討を行った。その結果、男性役割規範は男女いずれにおいても偏見促進要因として作用するが、平等主義による抑制効果は女性にのみみられた。また女性においては、同性愛者に対する潜在的偏見を平等主義が抑制する効果が、男性役割規範によって無効化される調整効果が、レズビアンに対する偏見においてのみみられた。以上の結果から、男性より女性において、同性愛者に対して正当化・抑制モデルに沿った偏見表出過程が生起しやすいことが考えられる。

序論

かつて同性愛は、性的指向の1つではなく逸脱した性の形態であると理解されていた。例えば、1969年以降に日本国内において出版された『広辞苑』第二版および第三版には、同性愛は“同性を愛し、同性に性欲を感じる異常性欲の一種”であると記載されており、同性愛者団体の申し入れによって削除される1991年まで、改められることはなかった（風間・河口、2010）。また1990年には、東京都府中青年の家を合宿利用中の同性愛者団体が、他の団体から同性愛者であることを理由に嫌がらせを受け、さらに施設に対してこの件を申し立てたところ施設利用を断られるという事件が発生した（風間・河口、2010）。この事件はその後裁判になり、同性愛者団体が勝訴することとなった。オルポートは、経験的事実に基づかず、対象に対して抱く非好意的感情を偏見と称した（Allport, 1954 原谷・野村, 1968）。上記のように、確固たる根拠がないのに同性愛者は異常であるとみなしたり、単に同性愛者であるという理由だけで否定的態度をとることは、オルポートの定義による偏見に相当するものである。このように、同性愛者は長らく偏見の対象とされてきたが、1990年以降は同性愛に対する社会の態度が寛容な方向へ変化してきていることが明らかにされている（石原, 2013）。2015年現在では、渋谷区で同性愛カップルのパートナーシップ条例が認められる（日本経済新聞, 2015）など、日本

社会は公的に同性愛に寛容になってきた。一方で、兵庫県宝塚市の議会では、性的マイノリティ (LGBT) への支援施策をめぐり、市議が「条例ができた場合“同性愛者が集まり、HIV 感染の中心になったらどうするんだ”という議論も市民から起こる」と発言している (産経 WEST, 2015)。これは、HIV 感染は異性愛者間でも起こりうるという事実を無視し、同性愛と HIV が密接に関連しているという誤解に基づく発言である。このように、寛容のようにみえる現在の日本社会においても、未だ同性愛者に対する偏見が根強く残っていることが窺える。

上記の発言にみられるような、同性愛者あるいは同性愛に対する不合理で曲解された見解に基づく偏見のことを、ホモフォビア (Homophobia) という (Gonsiorek, 1988)。同性愛者は、赤の他人または友人や家族から示されるこのようなホモフォビアと日常的に対峙しなければならない。そのため同性愛者は、自分の親族や親しい友人にすら自身が同性愛者であることを開示することができず、多大なストレスを抱えていることが指摘されている (日高, 2007; 杉山, 2006)。またそのようなストレスの影響により、男性同性愛者 (以下、ゲイ) は男性異性愛者 (以下、男性) より拒食症になる割合が高く (Feldman & Meyer, 2007; Russell & Keel, 2002)、女性同性愛者 (以下、レズビアン) のアルコール摂取率は女性異性愛者 (以下、女性) より高いことが分かっている (Gruskin, Hart, Gordon, & Ackerson, 2001)。このように、同性愛者はホモフォビアの存在によって様々な影響を受けており、私的公的いずれにおいてもその権利が脅かされているといえる。したがって、日本社会が同性愛者に対して寛容になりつつある中においても、ホモフォビアを示す人々が存在する原因を解明することは、間接的ではあるが同性愛者の私的公的権利を守る事にもつながると考えられる。

ホモフォビア表出の調整要因

上述したように、一部の人たちは同性愛者に対して肯定的態度を示し、一部の人たちは否定的態度をとることがわかっている。このような個人差を規定する要因は何であろうか。人種差別などの研究においては、“自身の差別的態度を統制したいという動機” (Motivation to Control Prejudiced Reactions, 以下 MCPR) が、人が無意識のうちに抱く偏見 (潜在的偏見) と、態度や行動として表出される偏見 (顕在的偏見) の間の関係を調整することを明らかにしている。同性愛者に対する偏見であるホモフォビアにおいても、この要因が影響していることが考えられる。人が無意識のうちに抱く同性愛者に対する偏見 (以下、潜在的ホモフォビア) と同性愛者に対して態度や行動として表出される偏見 (以下、顕在的ホモフォビア) 間の MCPR による調整効果については、Gabriel, Banse, & Hug (2007) と Rohner & Bjorklund (2006) などが検討を行っている。

Gabriel *et al.* (2007) は、潜在的ホモフォビアと顕在的ホモフォビア、また潜在的ホモフォビアと同性愛者団体への援助行動との関係における MCPR の調整効果について検討を行った。さらに、MCPR による潜在的ホモフォビアと援助行動の関係における調整効果は状況要因 (状

況が公的か私的か)によってさらに調整されると予測し、状況要因も加えて検討を行っている。潜在的ホモフォビアを潜在連合テスト (Implicit Association Test: 以下IAT: Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998) によって、MCPRと顕在的ホモフォビアを質問紙によって測定し、援助行動を同性愛者団体の嘆願書への署名の意志と団体への寄付金額によって測定した。状況要因としては、参加者が嘆願書に署名し募金箱に寄付をする間、実験者が同じ部屋に居続ける公的条件と実験者が席を外す私的条件の2条件を設けている。分析の結果、MCPRが低い場合は潜在的ホモフォビアが高いほど顕在的ホモフォビアも高くなるが、MCPRが強いと潜在と顕在の間にそのような正の関連はみられなかった。また、MCPRが潜在的ホモフォビアと援助行動の間の関連を調整する効果は公的条件ではみられたが、私的条件においては、調整効果はみられなかった。以上のGabriel *et al.* (2007) の研究結果から、MCPRは潜在的ホモフォビアと顕在的ホモフォビアの間の関係を調整していることが明らかとなった。

Rohner & Bjorklund (2006) も同様に、潜在的ホモフォビアと顕在的ホモフォビアの関係におけるMCPRによる調整効果を検討している。Gabriel *et al.* (2007) と異なるのは、MCPRを実験的手法を用いて操作し、潜在的ホモフォビアと顕在的ホモフォビアの関係における調整効果を検討している点である。これは、Rohner & Bjorklund (2006) が、因果関係をより明確にするために個人変数ではなく実験操作によってMCPRの調整効果を検討することを目的としていたからである。潜在的ホモフォビアは、様々な年代の異性愛および同性愛カップルの写真をターゲット刺激として使用したIATによって測定し、顕在的ホモフォビアはIATの刺激として使用したカップルの写真の印象を評定させることによって測定している。MCPRの操作は、写真の印象評定の際に参加者に与える説明によって行った。低MCPR条件では、写真評定の際に“異なる年齢層のカップルに対する態度テスト”であると説明し、高MCPR条件では“同性愛者、異性愛者のカップルに対する態度テスト”であると説明した。写真の評価得点を従属変数、実験条件(カテゴリカル変数)とIAT得点(連続変数)を独立変数として共分散分析を行った結果、交互作用は有意ではなく、実験的に操作したMCPRの調整効果はみられなかった。

MCPRの調整効果が確認されなかったことについて、Rohner & Bjorklund (2006) は、個人変数としてのMCPRや所属集団の社会規範と自身の行動との乖離などが結果に影響を及ぼしていた可能性を指摘している。なお、Rohner & Bjorklund (2006) が行ったMCPRの実験的操作の内容は、他者に自身の差別的態度が露見するか否かを操作した点において、Gabriel *et al.* (2007) の状況要因(公的vs. 私的)とほぼ同じ内容であったと考えられる。Biernat, Vescio, & Theno (1996) は、状況要因は、自身が信奉している優勢な信念と合致する場合は態度に影響を及ぼすが、そうでない場合、その効果は有効ではないことを明らかにしている。以上のことから、潜在的偏見と顕在的偏見の関係性を調整しているのは状況要因ではなく個人変数であり、状況要因はあくまで個人変数による調整効果を顕在化させる要因であると考えら

れる。しかし一方で、IATの信頼性・妥当性・統制可能性の検討を目的として、潜在的ホモフォビアと顕在的ホモフォビアの関係をMCPRが調整するか否かを検討したBanse, Seise, & Zerbes (2001) では、MCPRによる調整効果はみられなかった。したがって個人変数としてのMCPRの調整効果については、未だ一貫した結果は得られていないといえる。

潜在的ホモフォビアと顕在的ホモフォビア間の関係を調整する要因が明確にされていないことについては、同性愛者に対する態度の両価性が原因であると考えられる。Craig, Martinez, Kane, & Gainous (2005) は、人は同性愛のような重要な社会問題に対して肯定的・否定的両方の態度と価値規範を同時に持っていることを指摘し、その価値対立が大きいほど同性愛者に対する態度も両価的になるとして検討を行った。その結果、人は同性愛者に対して肯定的・否定的両方の態度を同時に持ち合わせており、この態度両価性は矛盾する価値の対立が大きいほどより両価的になることが明らかになった。さらに、平等主義と伝統的生活スタイルとの価値対立が小さいほど、同性愛者に対して肯定的態度を示すことが明らかにされた。このことから、異性愛者は同性愛者に対して常に両価的な態度を保持しており、それは個人が抱く矛盾した価値規範同士の対立によって影響を受けることが示唆された。すなわち、ホモフォビアの表出は抑制要因か促進要因のどちらか一方だけに影響されるのではなく、この2つの要因の結合した影響を受ける可能性が示唆されたのである。したがって、これまでホモフォビアの表出を調整する要因が明確にされてこなかったのは、抑制要因と促進要因の両方から受ける影響を同時に考慮していなかったことが原因である可能性が考えられる。事実、これまでホモフォビアの抑制要因と促進要因の影響を検討する研究はあるものの、両者について同時に検討した研究はほとんど見受けられず、この2つの要因間の関係性は明確ではなかった。したがって本研究では、これら2つの要因間の関係性を明確にする理論モデルを用いてホモフォビアの表出過程を明らかにしていくこととする。

偏見の正当化・抑制モデル (Justification-Suppression Model of Prejudice)

これまでの差別研究では、無意識にあるいは自動的に形成される特定の集団に対する否定的評価やステレオタイプの表出を、個人が信奉する平等主義規範などの抑制要因によっていかに意識的に統制しうるか、というように、自動的過程と統制的過程の二分法に基づく2過程理論 (e.g., Devine, 1989) に従って偏見表出過程を検討することが主流であった。しかし、上述したように人は常に両価的な規範・信念を保持しており、その価値対立が偏見表出に影響を与えていることがわかっている (Craig *et al.*, 2005)。したがって、偏見の抑制過程に着目した2過程理論のようなモデルだけでは偏見表出過程を十分に説明することはできないと考えられる。なぜなら、個人は、偏見を抑制するよう働く平等主義規範だけでなく、偏見を促進するよう働く反平等主義的規範も同時に保持している場合が多く、両者が相克しつつ複合的に作用している可能性が高いからである。これに対しCrandall & Eshleman (2003, 2005) は、上記の差別

研究における2過程理論、偏見抑制の際の葛藤、さらに偏見の原因あるいは促進要因についてのこれまで得られた知見を統合し、それらを含む理論モデルとして差別の正当化・抑制モデルを提案した。Crandall & Eshleman (2003, 2005) は、このモデルによって様々な集団に対する偏見表出を説明することが可能であると主張しており、ホモフォビアの表出過程を明らかにする上でもこのモデルを用いることが最も適当であると考えられる。したがって本研究では、差別の正当化・抑制モデルを用いてホモフォビア表出の心的過程を明らかにする。

正当化・抑制モデルは、人は初期に形成されたある集団に対する否定的情動（真の偏見）を、自ら保持する様々な信念や規範（たとえば、平等主義や人道主義など）によって抑制しようとするが、同時に伝統的性役割規範やステレオタイプといった偏見促進要因にあたる規範・信念によって偏見を正当化し表出させると説明する。すなわち、正当化・抑制モデルでは、抑制過程と正当化過程という2つの偏見表出を調整する過程が存在することを想定している。このモデルは①真の偏見、②抑制過程、③正当化過程、④表出／体験された偏見、の4つの要因から構成されている。以下では、順を追ってこの構成要因およびその過程について説明を行う。

正当化・抑制モデルにおいて①真の偏見とは、ある集団に対する、人生の初期に形成される否定的情動であると定義づけられている。すなわち、態度対象と評価の間に形成される連合に基づく潜在的偏見と同義であると考えられる。この真の偏見（潜在的偏見）は、偏見表出を促す動機づけの機能を持つ、いわばモデルを作動させるエンジンにあたる要因である。しかし、人はこの動機づけに従ってただ偏見を表出させるのではなく、まず初めに、社会化の過程で個人が学習した平等主義思想に基づく規範・信念によって偏見の表出を抑制する。

これが、②抑制過程である。この過程において偏見を抑制する要因（以下、抑制要因）として作用する規範・信念は、平等主義のように広範な偏見に作用するものであることがほとんどであり、これまでの研究において偏見の緩和要因であるとされてきたものがそれにあたる。抑制過程においては、抑制要因と偏見表出動機とが衝突するため葛藤が生じる。この葛藤が大きくなると、それを解消するために、様々な規範や信念を用いて偏見を正当化しようとする過程が生起する。

これが、③正当化過程である。この過程において偏見を正当化する要因（以下、正当化要因）は、これまで偏見の原因もしくは促進要因と考えられてきたものであると定義づけられている。この正当化要因にあたる規範・信念は確固たる論拠がなく、適用できる偏見対象が限定されているものがほとんどである。たとえば、人種差別を正当化するために用いられるプロテストタントの労働倫理は、ホモフォビアの正当化のために用いることができないように、各偏見に対して特定の正当化要因が存在する。正当化要因は、自身の偏見が正当であるという説明付けを内的・外的に行うため、偏見の表出をしながらも同時に自身の抱く平等主義的自己像や平等主義的感覚が守られ、また内的・外的に批判されることを回避することが可能となる。したがって正当化要因は、抑制要因による偏見表出抑制効果を無効化する機能も兼ね備えていることに

なる。このように、抑制要因による偏見抑制効果を無効化して偏見を解放することから、正当化要因はこのモデルにおいて“偏見の解放装置”とも呼ばれている。このような、偏見を正当化するための理由付けを行う過程は、自身の抱く偏見が不適切なものだとするイデオロギーや信念、社会的規範がなければ生じない。したがって正当化要因は、個人の偏見表出が抑制されて初めて意識上に昇ると想定されている (Crandall & Eshleman, 2003, 2005)。そのため、正当化・抑制モデルにおける正当化の過程は、必ず抑制の後に生じるとされている。正当化・抑制モデルでは、人はほとんどの場合、抑制か正当化のどちらかではなく、この2つの要因による調整過程を経て、最終的に偏見を表出するとされている。

そして最後に、偏見表出、すなわち④表出／体験された偏見が現れる。表出された偏見とは、質問紙によって測定されるような態度および差別的行動などを指し、体験された偏見とは、自身の偏見の主観的な受容のことである。この表出された偏見と体験された偏見はほぼ交換可能なものであると定義されているが、その後の理論では主に“表出された偏見”についての議論がなされており、これは一般に顕在的偏見と称されているものにあたると思われる。本研究でも、あくまで偏見の表出に着目し、個人が自身の偏見をどのように受容しているかという点については検討しないこととする。なお、Crandall & Eshleman (2003, 2005) は、人は基本的に偏見を抑制するよりは正当化する傾向にあると結論づけている。

Crandall & Eshleman (2005) は、正当化・抑制モデルにおける偏見表出について2つの理論仮説を立てている。まず、抑制要因が弱い場合、潜在的偏見は容易に正当化され表出されるため、潜在的偏見と顕在的偏見の間の相関は強くなる。その一方で、抑制要因が強く正当化要因が相対的に弱い場合、潜在的偏見表出の抑制効果が正当化要因によって無効化されにくいいため抑制効果が機能し、潜在的偏見と顕在的偏見の間の相関は弱くなる、という仮説である。しかしCrandall & Eshlemanは、抑制要因と正当化要因が共に強い場合については仮説を立てていない。両要因が強い場合というのは、Craig *et al.* (2005) が述べている、相反する価値規範の対立が大きい場合にあたると思われる。正当化・抑制モデルに基づけば、偏見の表出を抑制する際に経験される葛藤が大きいほど、正当化の過程が生じやすいことが考えられる。そこで本研究では、上記2つの仮説に加え、抑制要因と正当化要因が共に強い場合は、偏見の表出はいったん抑制されるが、葛藤解消への動機づけが高まり、正当化要因が顕現化し、結果的に潜在的偏見と顕在的偏見の間の相関が高くなるという仮説を新たに立てることとした。また、Crandall & Eshlemanは、潜在的偏見の強度と抑制、正当化要因の関係を含めた仮説も立てていない。彼らの理論では、正当化の過程は、潜在的偏見を抑制する際に生じる葛藤により生起すると想定されているが (Crandall & Eshleman, 2003, 2005)、この考えに従うと、潜在的偏見が強いほど抑制の際に生じる葛藤が大きくなるため、その後に生起する正当化過程が強くなることが予想される。そのため本研究では、潜在的偏見が弱い場合より強い場合のほうが、抑制要因が強いほど正当化要因が強くなり生起して偏見の表出が容易になるという仮説を独自に立

て検証することとした。

先述したように、正当化・抑制モデルの偏見表出過程について抑制と正当化両要因を合わせて実証的に検討している研究はこれまでのところほとんど見当たらない。そこで本研究では、同性愛者のホモフォビア表出過程に注目し、正当化・抑制モデルを実証的に検証することを目的とする。そのためにまず、本研究で検証するホモフォビアの抑制要因と正当化要因を先行研究に基づいて選定する。

ホモフォビアの正当化と抑制

抑制要因 広範な偏見表出を抑制する代表的な要因の1つとして平等主義規範があるが、ホモフォビアもまた、平等主義規範によって抑制される可能性が指摘されている (Biernat *et al.*, 1996)。Biernat *et al.* (1996) は、価値逸脱の情報とカテゴリー集団情報を競合させ、どのような場合にカテゴリー集団情報に基づく偏見が抑制されるかについて検討を行った。Biernat *et al.* (1996) は Study 2 において、平等主義規範あるいはプロテスタントの労働倫理を想起させるプライムが、価値逸脱情報とカテゴリー情報を競合させた場合に与える影響について、同性愛者をターゲットカテゴリーに用いて検討を行っている。まず初めに、実験参加者に平等主義 (平等主義プライム条件) あるいは労働倫理 (労働倫理プライム条件) についてのスピーチを聞かせ、その後、大学と共同事業を行っている企業の従業員採用の際のアドバイスを求めた。具体的には、ある従業員に関する、労働倫理価値に逸脱、あるいは一致する特性と、同性愛者であるか同性愛者であるかカテゴリー情報を提示し、その従業員の特性について評価するよう求めた。また個人変数として、参加者自身の労働倫理信奉度を測定している。その結果、平等主義プライム条件では、労働倫理信奉度が低い参加者は、労働倫理信奉度が高い参加者より、同性愛者を肯定的に評価していることが明らかになった。Biernat *et al.* (1996) は労働倫理信奉度が低いことは、平等主義信奉度が高いことを示していると解釈できると述べている。以上のことから、スピーチにより平等主義信念が一時的に顕現化した状況では同性愛者に対する態度が肯定的になる可能性が示唆され、またその効果は、平等主義信念を信奉している者において生起する可能性が示された。しかし Biernat *et al.* (1996) の実験では、平等主義規範意識は状況要因で操作し、個人変数としては測定していない。そのため、個人変数としての平等主義信念がホモフォビアの抑制要因として作用するのか、検討する必要があると考えられる。したがって本研究では、ホモフォビアの抑制要因として平等主義を採用し、その効果を実証的に検証する。

正当化要因 正当化・抑制モデルにおいて正当化要因は、これまで偏見を引き起こす原因であると考えられてきた要因がそれにあたりと定義づけられている (Crandall & Eshleman, 2003, 2005)。ホモフォビアについての多くの研究では、男性は女性より同性愛者に否定的態度を示すことが明らかにされており (e.g., Herek, 2002; Hooghe, 2011; Lingardi, Falanga, & D'

Augelli, 2005;)、特に男性はゲイに対して強い否定的態度を示すことが確認されている (e.g., Herek, 2002)。このように男性が女性より強いホモフォビアを示す原因、そしてレズビアンよりゲイに対して強いホモフォビアを示す原因として、男性役割規範の存在が指摘されてきた。男性役割規範とは、“男は～のようにあるべきだ”と男性のあり方を規定する規範である (林, 2002)。この男性役割規範の内容にはすでに“同性愛に対する拒否”が含まれており (林, 2002; Levant, Hall, & Rankin, 2013)、男性は、この男性役割規範に則り自身の男性性を示そうとするために、あるいは男性としての自尊心を維持しようとするために、防衛的にホモフォビアを示す可能性が指摘されている (Herek, 2002; Falomir-Pitchastor & Mugny, 2009)。さらに和田 (2008) は、伝統的な男性役割規範に賛同している者ほど、男女ともにゲイ・レズビアン両者に対して否定的になることを明らかにした。男性役割規範を信奉する女性が何故、同性愛者に否定的態度を示すのかということについて、和田 (2008) では詳しい考察はなされていないが、おそらく、そのような女性は、ゲイが男性役割規範から逸脱していると認識しているからではないかと考えられる。また、男女いずれも男性役割規範を信奉する者ほどレズビアンに対して否定的態度を示したのは、レズビアンが男性役割規範を遵守する社会の秩序を脅かしていると認識されるからだと考えられる。男性が男性役割規範に則り異性愛者として生活するためには、女性が異性愛者であり、男性を性愛の対象とすることが必要だと考えられる。それゆえ、男性を性愛の対象としないレズビアンは、男性役割規範を脅かす存在といえる。加えて、一般に異性愛者は、ゲイは女性的、レズビアンは男性的な外見をしていると信じる傾向にあることが指摘されている (Freeman, Johnson, Ambady, & Rule, 2010)。すなわち、男女とも伝統的男性役割規範を信奉している場合は、男性でありながら女性的であるゲイと女性でありながら男性的であるレズビアンは、男性役割規範を脅かす存在として認識されるため、同性愛者に対して否定的態度を示す可能性が考えられる。したがって、男性役割規範は男性女性双方においてホモフォビアの正当化要因になりうるといえる。

以上より本研究では、ホモフォビアにおける正当化要因として男性役割規範の効果を検討することとする。これまで、男性役割規範のホモフォビア促進機能は検討されてきたが、抑制要因である平等主義規範の効果を無効化する正当化要因としての機能は検証されてこなかった。したがって本研究では、男性役割規範の正当化要因としての調整効果を検討する。

仮説

本研究では、偏見の正当化・抑制モデルにおける理論仮説に従い、1-1、1-2、1-3という3つの仮説を立てる。さらに、正当化・抑制モデルの理論に従って独自に仮説1-4と仮説2を立てた。本研究では以下の5つの仮説を検証する。

1-1 潜在的ホモフォビアの程度が強いと、顕在的ホモフォビアの程度も強くなる。

1-2 平等主義規範意識が弱いと、潜在的ホモフォビアの表出が男性役割規範により容易に

促進されるため、結果として潜在的ホモフォビアと顕在的ホモフォビアの相関は高くなる。

- 1-3 平等主義規範意識が強く男性役割規範意識が弱い場合、潜在的ホモフォビアの表出が抑制されるため、潜在的ホモフォビアと顕在的ホモフォビアの相関は低くなる。
- 1-4 平等主義規範意識が強く男性役割規範意識も強い場合、潜在的ホモフォビアの表出はいったん抑制されるが、男性役割規範による正当化が強く生起し、結果的に潜在的ホモフォビアと顕在的ホモフォビアの相関が高くなる。
- 2 潜在的ホモフォビアが強く、平等主義規範意識が強い場合、強い葛藤が生じるため正当化要因として男性役割規範が顕在化しやすくなり、男性役割規範によって顕在的ホモフォビアが高められやすくなる。

方法

実験参加者と手続き

実験には、大阪市立大学の学部学生93名（女性45名、男性は47名、性別不明は1名）が参加した。平均年齢は18.98歳（ $SD=1.79$ 歳）であった。心理学関連授業に出席する学生に対して授業終了時に実験への参加協力を募り、それに同意した学生に後日個別に実験参加を依頼した。

実験は、1名ずつ個別に実施した。最初に、実験への参加に際して参加者の権利および匿名性は守られる旨を紙面及び口頭の両方によって参加者に説明し、実験参加への同意書に署名を求めた。その後、潜在的ホモフォビアを測定するための潜在連合テスト（IAT）を実施し、次に抑制要因として平等主義尺度、正当化要因として男性役割規範尺度に回答を求め、さらに顕在的ホモフォビアの指標として同性愛者に対する態度尺度に回答してもらった。最後にディブリーフィングを行い、データ使用の同意書に署名を求めた。なお分析には、実験参加同意書およびデータ使用の同意書両方に署名した参加者のみを対象としている。

1. 潜在的ホモフォビアの測定

潜在的ホモフォビアの測定にはIATを使用した。人は無意識のうちに、様々な対象に対して肯定的あるいは否定的態度を持っており、この潜在的態度を測定するために考案されたのがIATである（Greenwald *et al.*, 1998）。ある対象に対してどの程度無意識のうちに「良い」あるいは「悪い」という評価概念が連合しているのか、その連合強度を測定することを目的としており、連合強度が強いほど反応時間が短く、連合強度が弱いほど反応時間が長くなると想定されている。IATのプログラムを、Milisecond Software社のInquisit 4を用いて作成し、刺激の提示と反応の計測をデスクトップ型パーソナルコンピュータ（ヒューレット・パッカード社製compaq pro 6300）により行った。IATは、7つのブロックから構成されており。対になった2つの対照的な評価対象と、「良い」あるいは「悪い」という評価概念を用いる。本研究で

は潜在的ホモフォビアを測定するため homonegativity IAT を用い、対照的な評価対象として「同性愛」と「異性愛」を用いた。「同性愛」に対応する刺激としては、ゲイ・レズビアンカップルを表す画像を各5個ずつ計10個、「異性愛」に対応する刺激として異性愛カップルを表す画像を10個用意した。また、評価概念は「良い」と「悪い」を用い、それぞれに関連する単語を10語ずつ用意した（「良い」：自由、健康、など、「悪い」：汚物、殺人、など）。

7つのブロックは、大きく分けて練習課題と本課題に分かれており、ブロック1、2、3、5、6は練習課題、ブロック4と7が本課題である。課題中は、黒い画面の右上と左上に、「同性愛」「異性愛」という各評価対象のカテゴリー名と「良い」「悪い」という評価概念のカテゴリー名が、単体あるいは対になって呈示される。そして参加者は、画面の中央に1つずつ呈示される、評価対象を表す刺激あるいは評価概念に関連する単語刺激が、呈示されているカテゴリーのどちらに分類されるのか、I（右カテゴリー）またはE（左カテゴリー）のキーを押すことによって弁別するよう指示される。ブロック1は、「良い」「悪い」というカテゴリー名のみが画面上部に呈示され、単語の弁別練習課題となっている。ブロック2は、「同性愛」「異性愛」というカテゴリー名のみが画面上部に呈示され、同性愛あるいは異性愛を表す画像刺激を弁別する練習課題である。次のブロック3、4では対象カテゴリー名と評価概念のカテゴリー名が「同性愛・良い」「異性愛・悪い」といったように同時に左右上部に呈示され、画面中央に呈示される画像刺激または単語を、この4つのカテゴリーのうち正しいものにI（右カテゴリー）とE（左カテゴリー）のキーを用いて弁別する課題となっている。次のブロック5では再び単語の弁別課題となるが、ここではブロック1～4と「良い」「悪い」の呈示される位置が反転している。次に続くブロック6、7でもブロック3、4と同様に対象カテゴリー名と評価概念カテゴリー名が同時に呈示されるが、対呈示される組み合わせが「同性愛・悪い」「異性愛・良い」というように逆になっている。潜在的ホモフォビアの指標として、「同性愛・良い」「異性愛・悪い」のブロックでの平均反応時間から「同性愛・悪い」「異性愛・良い」のブロックでの平均反応時間を引いた値を用いてIAT得点を算出した。値が大きいほど「同性愛・良い」より「同性愛・悪い」の連合が強く、潜在的に同性愛に対して否定的評価が形成されているとして、潜在的ホモフォビアの指標とした。

画像刺激は、潜在的ホモフォビアを測定するIATの刺激としてインターネット上で公開されていた画像刺激を一部改変し、実験に用いた（Nosek, Smyth, Hansen, Devos, Lindner, Ranganath, Smith, Olson, Chugh, Greenwald, & Banaji, 2007）。女性の簡易化されたシルエット図を2つ並べたものをレズビアンのカップルを表す刺激、男性の簡易化されたシルエット図を2つ並べたものをゲイのカップルを表す刺激として使用した。いずれも、刺激図の色を黒・黄・青・緑・赤の5色ずつ用意し計10個を作成した。また同性愛者を表す画像と同様に、男女の簡易化されたシルエット図を並べて異性愛カップルを表す刺激を作成し使用した。同性愛カップルと同様に5色の刺激図を用意し、男女の位置を反転させたものも同様に5色作成し、合計10個の刺激を

作成した。単語刺激はGreenwald *et al.* (1998) に収録されていた単語リストを和訳し、それらを参考に漢字二文字からなる熟語を「良い」と「悪い」の各カテゴリーにつき10個ずつ構成し実験に用いた。各画像刺激や単語刺激は、1ブロックにつき1回ずつ呈示され、同じ刺激が重複して呈示されることはなかった。

2. 平等主義規範意識の測定

参加者の平等主義的規範意識の高低を測定するため、人道主義的-平等主義 (Humanitarianism-Egalitarianism) 尺度 (Katz & Hass, 1988) (以下、平等主義尺度) を和訳し用いた。尺度は、“人は、全ての人々にやさしくするべきだ”などの項目を含む全10項目から構成されており、参加者は各項目について7件法 (1全くそう思わない～7非常にそう思う) で回答した。

3. 男性役割規範意識の測定

参加者がどの程度男性役割規範を信奉しているかを測定するため、Levant *et al.* (2013) による男性役割規範短縮版尺度 (Male Role Norms Inventory Short-Form (以下、男性役割規範尺度)) を和訳し用いた。なお、林 (2002) も同様にLevantらの開発したMale Role Norms Inventory (以下、MRNI) を和訳しているが、林による日本語版尺度はLevant & Fischer (1996) のMRNI尺度に基づいている。本研究で和訳した男性役割規範尺度は、Levant *et al.*, (2013) がMRNI尺度を改訂して作成したMale Role Norms Inventory-Revisedの短縮版であり、項目内容も異なる点が多い。和訳に際しては、Brislin (1970) の提案しているバックトランスレーション⁽¹⁾の手法によった。本尺度は、「女性性の回避」(“男性はドラマよりフットボールを見るべきである。”など)、「同性愛に対する拒否」(“同性同士の結婚は認められるべきではない。”など)、「機械技術における自立」(“男性は家の中のものを修理できるべきである。”など)、「支配性」(“男性はどこの団体・組織においてもリーダーであるべきである。”など)、「感情表現の抑制」(“男性は感情的な状況から距離を置くべきである。”など)、「強韌さ」(“男性は辛いことがあった際、強くあるべきである。”など)、「性交渉の重要性」(“男性は常に性行為を好むべきである。”など) の7因子各3項目計21項目から構成されている。ただし本研究では、同性愛者に対する否定的態度を別の質問紙によって測定するため、内容が重複する「同性愛に対する拒否」にあたる項目は実験で使用する尺度からは除外した。そのため実験では、6因子18項目からなる尺度を用いた。参加者は各項目について、5件法 (1全くそう思わない～5非常にそう思う) で回答した。

4. 顕在的ホモフォビアの測定

参加者の顕在的ホモフォビアの程度を測定するため、Herek (1998) の開発したゲイとレズビアンに対する態度尺度 (Attitudes toward gay men and lesbians scale) を和訳し使用した。この尺度は、ゲイに対する態度尺度 (以下、ATG) とレズビアンに対する態度尺度 (以下、ATL) 各10項目 (ATG: “ゲイのカップルは、男女のカップルと同じように、養子縁組して子どもを持つことが許されるべきだ。”など、ATL: “レズビアンの存在は、我々の社会に適し

ていない。”など)、計20項目で構成されており、いずれも1因子構造であった。参加者はいずれの態度尺度においても各項目に対して(1全くそう思わない~5非常にそう思う)の5件法で回答した。

5. 個人属性

最後に、参加者自身の年齢・性別・性指向について回答を求めた。年齢と性別は質問紙の所定の欄に自由に記述してもらった。また、性指向については(異性愛/異性愛以外)のうち当てはまる方を選択してもらった。

結果

異性愛以外と答えた2名、回答に欠損のあった3名を除外した88名のデータを分析対象とした。女性は45名、男性は43名であり、平均年齢は18.97歳(SD=1.84歳)であった。なお、平等主義規範得点、男性役割規範得点、顕在的ホモフォビア得点(ATG得点、ATL得点)はいずれも、得点が高いほどその傾向が強いことを示すよう尺度化を行った。男性役割規範得点は、因子ごとに分けず全項目の得点を合成して算出した。各尺度の男女別の平均値と標準偏差および α 係数、男女間の t 検定の結果を表1に示す。

記述統計

1. 各変数における性差の検討

各平均値の性差を検討した結果、平等主義規範得点は男性より女性のほうが有意に高く($t(86) = 2.66, p < .01$)、ゲイに対する顕在的偏見(ATG得点)は、有意傾向ではあるが、男性が女性より高い傾向にあった($t(86) = -1.91, p < .10$)。その他の得点では、性差は認められなかった。

表1 男女別各尺度の平均値およびその性差の検定結果

	α	男性	女性	t 検定
IAT得点	-	0.64 (0.80)	0.63 (0.80)	$t(86) = -0.04, n.s$
平等主義	.79	4.81 (0.83)	5.23 (0.63)	$t(86) = 2.66, p < .01$
男性役割規範	.83	2.34 (0.43)	2.19 (0.55)	$t(86) = -1.46, n.s$
ATG	.86	2.49 (0.65)	2.21 (0.69)	$t(86) = -1.91, p < .10$
ATL	.84	1.88 (0.58)	1.75 (0.48)	$t(86) = -1.09, n.s$

() 内はSD

表 2 男女別相関分析表

	平等主義	男性役割規範	ATG	ATL
IAT得点	.160	-.080	-.010	-.065
女性 平等主義		.044	-.370 *	-.360 *
女性 男性役割規範			.249 †	.265 †
ATG				.803 ***
IAT得点	.045	.072	.129	.132
男性 平等主義		-.039	-.010	-.067
男性 男性役割規範			.527 ***	.395 **
ATG				.826 ***

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

2. 各変数間の相関分析

男女別に各尺度間の相関分析を行い、その結果を表 2 に示した。分析の結果、男女いずれにおいても潜在的ホモフォビア (IAT 得点) と顕在的ホモフォビア (ATG・ATL 得点) の間に有意な相関がみられなかった。また、女性では平等主義規範意識と顕在的ホモフォビア (ATG・ATL 得点) の間に負の相関がみられたが、男性では有意な相関はみられなかった。男性において、男性役割規範意識と顕在的ホモフォビア (ATG・ATL 得点) の間に正の相関がみられ、女性においても有意傾向ではあったが正の相関がみられた ($ps < .10$)。

仮説の検証 (階層的重回帰分析)

1. 仮説 1-1、1-2、1-3 および仮説 1-4 の検証

正当化・抑制モデルの理論仮説に沿った仮説 1-1、1-2、1-3、および独自に立てた仮説 1-4 を検証するために、従属変数を ATG・ATL 得点として、IAT 得点、平等主義規範得点、男性役割規範得点、性別 (IAT 得点、平等主義規範得点、男性役割規範得点は、平均値による中心化を行っている) を STEP 1、それぞれの 2 要因交互作用項を STEP 2、3 要因交互作用項を STEP 3、4 要因交互作用項を STEP 4 に投入して階層的重回帰分析を実施した。各 STEP における変数の投入は強制投入法により、分析ツールとしては清水・村山・大坊 (2006) の HAD を用いた。ATG 得点および ATL 得点の分析結果を表 3 に示す。なお、先行研究では性差は検討されていなかったため仮説を明確に立てることはできなかったが、男性は女性より男性役割規範を、より内在化させていると考えられ、当該規範による正当化効果が女性より強いことが予想されるため、探索的に性別を要因として投入した分析を実施した。

表3 階層的重回帰分析の結果

変数名	ATG得点				ATL得点			
	STEP 1	STEP 2	STEP 3	STEP 4	STEP 1	STEP 2	STEP 3	STEP 4
IAT得点	.077	.042	-.093	-.094	.063	.026	-.033	-.009
平等主義	-.185 †	-.302 **	-.354 **	-.354 **	-.196 †	-.259 *	-.323 **	-.310 *
男性役割規範	.360 ***	.484 ***	.473 ***	.473 ***	.321 **	.443 ***	.420 ***	.419 ***
性別	-.095	-.056	-.106	-.105	-.012	.005	-.010	-.024
IAT得点×平等主義		.147	.323 *	.324 *		.107	.140	.116
IAT得点×男性役割規範		-.117	-.196	-.196		-.193	-.202	-.185
IAT得点×性別		-.080	-.185	-.185		-.141	-.178	-.161
平等主義×男性役割規範		-.077	-.101	-.102		.010	.069	.101
平等主義×性別		-.293 **	-.352 **	-.352 **		-.191	-.228 †	-.237 *
男性役割規範×性別		-.166	-.135	-.134		-.138	-.149	-.159
IAT得点×平等主義×男性役割規範			.388 †	.383			-.001	.106
IAT得点×平等主義×性別			.358 *	.360 *			.246	.187
IAT得点×男性役割規範×性別			-.075	-.077			.079	.116
平等主義×男性役割規範×性別			-.089	-.090			.015	.039
IAT得点×平等主義×男性役割規範×性別				.010				-.230
R^2	.201	.317	.382	.382	.151	.232	.276	.283
F値	5.216 ***	3.577 ***	3.227 ***	2.970 **	3.681 **	2.325 *	1.984 *	1.892 *
ΔR^2 Step 1→Step 2		.116				.081		
ΔR^2 Step 2→Step 3			.065				.044	
ΔR^2 Step 3→Step 4				.000				.007
ΔF 値		2.186 †	1.922	0.002		1.357	1.100	0.722

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

ゲイに対する顕在的偏見（ATG得点） モデルの有意性、説明率の増加分の有意性から判断して、ATG得点ではSTEP 2のモデルが最も妥当であったため、このモデルにおける偏回帰係数にもとづき結果を解釈していく。

IAT得点の主効果 ($\beta = .042, n.s$) が有意ではなかったため、仮説1-1は支持されなかった。一方で平等主義規範 ($\beta = -.302, p < .01$) と男性役割規範 ($\beta = .484, p < .001$) の主効果が有意であった。すなわち、全体として、平等主義規範意識が高い者ほどゲイに対する否定的態度は低減し、男性役割規範意識が高い者ほどゲイに対する態度が否定的になる傾向にあることが明らかとなった。しかし、平等主義規範の効果には性差がみられた。平等主義×性別の交互作用が有意であったので下位検定を行った結果、平等主義がゲイに対する否定的態度を低減する効果は、女性では有意であったが ($\beta = -.720, p < .001$)、男性では有意ではなかった ($\beta = .012, n.s$)。このことから、平等主義規範は、女性においてのみゲイに対する顕在的ホモフォビアの抑制要因として作用していることがわかった。また、仮説1-2、1-3、1-4の検証にあたるIAT得点×平等主義×男性役割規範の3要因交互作用とIAT得点×平等主義×男性役割規範×性別の4要因交互作用が含まれたSTEP 3およびSTEP 4のモデルにおける説明率の増分が有意ではなかったうえ、上記の交互作用も有意ではなかった。したがって、仮説1-2、1-3、お

よび仮説1-4は、男女いずれにおいても支持されなかった。

レズビアンに対する顕在的偏見 (ATL 得点) モデルの有意性、説明率の増加分の有意性から判断して、ATL 得点ではSTEP 1 のモデルが最も妥当であったため、このモデルにおける重回帰係数にもとづき結果を解釈していく。

IAT 得点の主効果 ($\beta = .063, n.s$) が有意ではなかったため、仮説1-1は支持されなかった。一方で、男性役割規範 ($\beta = .321, p < .01$) の主効果が有意であった。また、有意傾向ではあったが平等主義規範 ($\beta = -.196, p < .10$) の主効果が認められた。すなわち、男女いずれにおいても、平等主義規範意識が高い者ほど、レズビアンに対する否定的態度が低減し、男性役割規範意識が高い者ほどレズビアンに対する否定的態度が増大していた。レズビアンに対する顕在的偏見においては、STEP 2、3、4いずれのモデルにおける説明率の増分も有意ではなく、また、仮説の検証にかかわる IAT 得点 \times 平等主義 \times 男性役割規範の3要因交互作用と IAT 得点 \times 平等主義 \times 男性役割規範 \times 性別の4要因交互作用が有意ではなかった。したがって、仮説1-2、1-3および仮説1-4はレズビアンに対する顕在的偏見においても男女とも支持されなかったことになる。

以上のことから、ゲイとレズビアンいずれの態度についても、仮説1-1、1-2、1-3および1-4は支持されないことが明らかになった。

2. 仮説2の検証

仮説2を検証するために、参加者を IAT 得点に基づき潜在的ホモフォビアの高群と低群に分けダミー変数を作成して重回帰分析を行った。IAT 得点の平均値 ($M=0.636$) 以下を低群、それより上を高群として群分けを行った。その結果、低群は42名 (男性20名、女性22名)、高群は46名 (男性23名、女性23名) となった。男女いずれにおいても、高群 (男性: $M=1.206, SD=.470$ 、女性: $M=1.213, SD=.484$) の方が低群 (男性: $M=0.011, SD=.584$ 、女性: $M=0.027, SD=.573$) より有意に IAT 得点が高かった (男性: $t(41) = -7.565, p < .001$ 、女性: $t(43) = -7.521, p < .001$)。また、高群と低群の男女の構成比に偏りはみられなかった ($X^2(1) = 0.50, p = .823$)。

男女別に以下のような手順で階層的重回帰分析を行った。まず、従属変数を ATG \cdot ATL 得点とし、STEP 1 に平等主義規範、男性役割規範、IAT 得点ダミー変数 (高群 = 1、低群 = -1)、STEP 2 でそれぞれの2要因交互作用項、STEP 3 で3要因交互作用項を投入する階層的重回帰分析を行った (平等主義規範得点と男性役割規範得点は平均値による中心化を行っている)。各STEPでの変数の投入は強制投入法により、分析ツールとしては清水ら (2006) のHADを用いた。男性参加者の分析結果を表4、女性参加者の分析結果を表5に示す。

男性の場合 モデルの有意性、説明率の増加分の有意性から判断すると、男性の場合は、ATG 得点と ATL 得点のいずれについてもSTEP 1 のモデルが妥当であると考えられたため、

これらのモデルにおける偏回帰係数に基づき仮説の検討を行う。

ATG得点、ATL得点いずれを従属変数とした場合でも平等主義規範の主効果は有意とならず、男性役割規範の主効果のみ有意であった（ATG得点： $\beta = .530, p < .001$ 、ATL得点： $\beta = .394, p < .01$ ）。このことから、男性においては、平等主義規範は抑制要因としては作用しておらず、男性役割規範のみがゲイとレズビアン両者に対する偏見の促進要因として作用していることが再度確認された。また、仮説の検証にあたる平等主義×男性役割規範×IAT得点の交互作用が有意ではなかったことから、潜在的ホモフォビアの強度は、平等主義規範と男性役割規範の調整効果に影響を与えておらず、また男性において平等主義規範と男性役割規範による調整効果自体がみられないことが明らかになった。したがって、仮説2は男性においては支持されなかった。

表4 男性における階層的重回帰分析の結果（IAT 高低群分け）

	ATG得点			ATL得点		
	STEP 1	STEP 2	STEP 3	STEP 1	STEP 2	STEP 3
平等主義	.004	-.012	.089	-.059	-.069	-.027
男性役割規範	.530 ***	.525 **	.512 **	.394 **	.428 *	.423 *
IAT得点	.129	.125	.129	.134	.136	.138
平等主義×男性役割規範		-.035	-.042		.009	.006
平等主義×IAT得点		-.040	.057		-.064	-.024
男性役割規範×IAT得点		.018	-.025		-.081	-.098
平等主義×男性役割規範×IAT得点			.243			.100
R^2	.295	.296	.332	.176	.185	.192
F値	5.435 **	2.527 *	2.488 *	2.783 †	1.366	1.185
$\Delta R^2_{step1 \rightarrow step2}$.002			.009	
$\Delta R^2_{step2 \rightarrow step3}$.036			.006
ΔF 値		0.026	1.880		0.134	0.264

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

女性の場合 モデルの有意性、説明率の増加分の有意性から判断すると、女性の場合には、ATG得点についてはSTEP 1のモデルが、ATL得点についてはSTEP 3のモデルがもっとも妥当であると考えられたため、これらのモデルにおける偏回帰係数に基づき仮説の検討を行う。

ATG得点、ATL得点いずれを従属変数とした場合でも、平等主義規範の主効果が有意であり（ATG得点： $\beta = -.373, p < .05$ 、ATL得点： $\beta = -.464, p < .01$ ）、男性役割規範の効果も有意傾向ながら認められている（ATG得点： $\beta = .279, p < .10$ 、ATL得点： $\beta = .272, p < .10$ ）。すなわち、女性においては、平等主義規範はゲイとレズビアンに対する偏見の抑制要因、男性役割規範は

促進要因として作用していることが示された。さらに、仮説の検証にあたる平等主義×男性役割規範×IAT得点の3要因交互作用は、ATG得点を従属変数とした分析では有意ではなかったが、ATL得点を従属変数とした分析では有意であった。下位検定の結果、IAT低群の平等主義高群において男性役割規範の主効果が有意であった ($\beta = .925, p < .05$) (図1)。またIAT高群では、平等主義低群において男性役割規範の主効果が有意であった ($\beta = .465, p < .05$)。以上のことから、潜在的ホモフォビアが低く平等主義規範意識が高い女性と、潜在的ホモフォビアが高く平等主義規範意識が低い女性は、男性役割規範によってレズビアンに対する顕在的偏見が促進されることが明らかになった。一方、ゲイに対する顕在的偏見については、このような潜在的ホモフォビアの高低による違いはみられなかった。したがって、仮説2は女性においても支持されなかった。

表5 女性における階層的重回帰分析の結果 (IAT 高低群分け)

	ATG得点			ATL得点		
	STEP 1	STEP 2	STEP 3	STEP 1	STEP 2	STEP 3
平等主義	-.373 *	-.490 **	-.491 **	-.365 *	-.458 **	-.464 **
男性役割規範	.279 †	.266 †	.266 †	.291 *	.273 †	.272 †
IAT得点	-.126	-.102	-.103	-.091	-.075	-.081
平等主義×男性役割規範		-.183	-.088		-.087	.247
平等主義×IAT得点		.186	.167		.209	.142
男性役割規範×IAT得点		-.037	-.038		-.008	-.014
平等主義×男性役割規範×IAT得点			-.138			-.483 *
R^2	.223	.297	.305	.216	.269	.372
F値	3.922 *	2.676 *	2.324 *	3.774 *	2.328 †	3.133 *
$\Delta R^2_{step1 \rightarrow step2}$.074			.052	
$\Delta R^2_{step2 \rightarrow step3}$.008			.103
ΔF 値		1.334	0.447		0.907	6.092 *

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

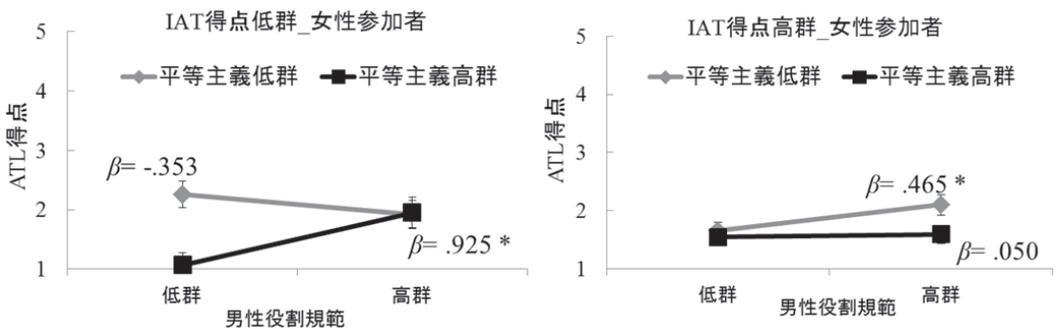


図1 IAT (高低) × 平等主義 × 男性役割規範の交互作用項の下位検定

考察

以上の結果を仮説と照らし合わせて検討する。まず、潜在的ホモフォビアが強いほど、同性愛者に対する顕在的ホモフォビアが強まるという仮説1-1は支持されなかった。正当化・抑制モデルにおいては潜在的偏見が最も基本的な動力源として位置づけられているが、本研究では、必ずしもその前提を満たす結果になっていない。また、潜在的ホモフォビアと顕在的ホモフォビアの関係を抑制要因である平等主義規範と正当化要因である男性役割規範によって調整されることを予測した仮説1-2、1-3、1-4に沿う結果も得られていない。そもそも男性においては平等主義規範がホモフォビアの抑制要因として作用していない可能性が示されたことから、男性のホモフォビア表出を規定する心的メカニズムは正当化・抑制モデルに沿わないことが考えられる。さらに、平等主義規範と男性役割規範による調整効果が潜在的偏見の強度によって変化することを予測した仮説2についても、予測に一致する結果を見出せなかった。以上のことから、本研究における仮説はすべて支持されなかったことになる。

以上のように仮説は支持されなかったものの、本研究では予想していなかった興味深い知見が得られた。それは、女性と男性ではホモフォビアの表出過程が異なる可能性が示唆された点である。また、本研究ではあくまで個人変数として平等主義規範意識および男性役割規範意識を測定しているため、これらの因果関係について断定することはできないものの、理論モデルである差別の正当化・抑制モデルに修正が必要である可能性を示すことができたと考えられる。モデルの修正の可能性については、後ほど考察する。

平等主義・男性役割規範による効果の性差

分析の結果から、平等主義規範は女性においてのみホモフォビアの抑制要因として作用し、男性の示すホモフォビアには全く影響を与えていないこと、また男性役割規範は男女いずれにおいても顕在的ホモフォビアを促進していることが明らかになった。以上のことから、平等主義規範がなぜ男性において抑制要因として作用しないかという点、男性において平等主義規範が抑制要因として作用していないなかで男性役割規範が男女いずれにおいても顕在的ホモフォビアを促進することがどのような意味を持っているのかという点の、2点について考察を行っていく。

平等主義

男性において、平等主義規範がホモフォビアの抑制要因として作用していないことについては、次の可能性が考えられる。序論や方法でも述べたように、男性役割規範には元々“同性愛に対する拒否”という要素が含まれており（林, 2002; Levant *et al.*, 2013）、男性的であることと反同性愛的であることはほぼ同義とみなされているといえる。そのため男性は、平等主義規範を信奉していてもそれを同性愛者にも適用すべきとは思っていない可能性が考えられる。本

研究の結果において男性役割規範の信奉度に男女差はみられなかったが、男性は女性に比べて男性役割規範への自我関与の程度が高く、規範に従って思考し行動するように強く動機づけられていることが推測される。その結果、平等主義規範が抑制要因として作用しなくなっていたことが考えられる。ただし、Crandall & Eshleman (2003, 2005) は、抑制要因は個人がどの程度平等主義を内在化しているかといった内的動機づけによるものだけではなく、評価懸念など外的動機づけによるものも含まれていると述べている。したがって男性は、同性愛者に寛容な姿勢を示すべきといった社会的要請や他者からの期待などの外圧によっては、ホモフォビアを抑制する可能性が考えられる。そのため今後は、男性において、外発的偏見抑制動機が顕現化するような状況を設定することによって、ホモフォビアが抑制されるのか検討すべきだと考えられる。また、男性は男性役割規範に抵触せず両立しうる他の価値規範や信念であれば、抑制要因として作用する可能性も考えられる。抑制要因としては平等主義の他にも、共感性 (Crandall & Eshleman, 2003, 2005) や、同性愛を生得的である (統制不可能である) とする信念 (Smith, Zanotti, Axelton, & Saucier, 2011) などがあり、男性において平等主義規範以外の規範・信念が抑制要因として作用するのかについても、検討すべきだと考えられる。

一方、女性では平等主義規範がホモフォビアの抑制要因として作用したことについては、女性は他者に優しく接するといった共同的な性質を持っているためだと考えられる。女性自身が考える女性性は、“相手の立場にたって考えられる” や “思いやりをもって人と接している” といった「共同性」が中核をなしていることがわかっている (土肥・廣川・水澤, 2008)。このような性質を保持しているため女性は平等主義規範との親和性が高いことが推測できる。女性は男性と比較して平等主義規範がより内在化されており、その規範に即して思考し行動する動機付けが高いため、ホモフォビアを抑制することが可能であったと考えられる。

男性役割規範

男性役割規範は、男女とも顕在的ホモフォビアを促進していることが示された。しかしこの男性役割規範の効果の発現過程は、男性と女性においてかなり異なることが推察できる。

男性においては、平等主義規範が顕在的ホモフォビアを抑制しておらず、男性役割規範のみが顕在的ホモフォビアを促進していた。平等主義規範が抑制要因として作用していないということは、そもそも男性の中に“同性愛者に対して偏見を示すのは不適切である” といった規範が共有されていない可能性を示している。このことは、正当化・抑制モデルに沿って考察すると、男性において男性役割規範はホモフォビアの促進要因として作用してはいるが、ホモフォビアを正当化するための要因として生起していないといえる。このことから、男性はゲイ・レズビアンいずれに対する偏見表出においても正当化・抑制モデルに沿った表出がなされていない可能性が考えられる。しかし、男性において正当化・抑制モデルに沿ったホモフォビアの表出がなされなかったことについては、これが男性本来の性質であるのか、あるいは、男性では平等主義規範以外の規範・信念によって抑制がなされており、本実験ではその心的過程を捉え

られなかっただけであるのかについては、更なる検討が必要であろう。

他方、女性においては、平等主義規範によるホモフォビアの抑制効果および、男性役割規範によるホモフォビアの促進効果の両方が確認されている。このことから、女性において男性役割規範は偏見を正当化する要因として作用している可能性がうかがえる。しかし、平等主義×男性役割規範×潜在的ホモフォビアの交互作用効果が有意であったのはレズビアンに対する偏見においてのみであった点は留意すべきである。そのためこの正当化要因による効果は、レズビアンに対する偏見においてのみいえることである。ゲイに対する偏見においては、女性の場合も、男性役割規範は、平等主義規範の抑制効果を調整せず単独で顕在的ホモフォビアを促進していることから、単純な促進要因として作用していることが考えられる。したがって女性では、レズビアンに対しては正当化・抑制モデルに沿った偏見表出がなされ、ゲイに対しては正当化・抑制モデルに沿った偏見表出がなされない可能性が示された。この点については、後ほど考察する。

女性における男性役割規範の正当化効果

女性に関しては、ゲイとレズビアンいずれに対する偏見においても平等主義規範は抑制要因、男性役割規範は促進要因として作用していたが、平等主義×男性役割規範×潜在的ホモフォビアの2次の交互作用はレズビアンにおいてのみみられた。したがって、男性役割規範の効果も異なることが考えられる。女性における、レズビアンとゲイに対する偏見表出過程の差異について、順を追って考察を行っていく。

レズビアンに対する偏見表出

本研究では、仮説2として潜在的ホモフォビアが強く、平等主義規範意識が強い場合、男性役割規範の調整効果が顕著になると予測した。しかし、女性におけるこのような男性役割規範による調整効果は、潜在的ホモフォビアが低く平等主義規範意識が高い場合に生起していた。

潜在的ホモフォビアが低い場合 潜在的ホモフォビアが低い場合には、平等主義規範意識が高い群において、男性役割規範によってレズビアンに対する偏見が促進されることが明らかにされた。これは、潜在的ホモフォビアが低い場合、平等主義規範意識が高いと、かえって、男性役割規範によってレズビアンに対する否定的態度を正当化し表出するようになることを表している。当初、このような平等主義高群における男性役割規範の促進効果は潜在的ホモフォビア高群において生起すると予測しており、予測とは逆の結果が得られたといえる。このことについては、本研究からは直ちに明らかにすることはできないが、以下の可能性が考えられる。

すなわち、潜在的ホモフォビアの低い人は、同性愛に無関心であったために、レズビアンに対する偏見の抑制に失敗した可能性である。人はマスメディアや隣人・友人などからもたらされる情報によって潜在的偏見を形成する。このことから、潜在的ホモフォビアの低い者は、同性愛者に関する知識や情報に接触する機会があまりなかったため、同性愛者に対して特定の感

情や態度が形成されていなかった可能性がある。同性愛者に対して特に否定的イメージや悪感情を抱いていない分、自身のホモフォビアが露呈することへの懸念をあまり抱かないと考えられる。それゆえ、特に平等主義規範意識の高い者は、自分は十分にレズビアンに対する偏見を抑制できているという認識を持つために、かえって潜在的ホモフォビアを抑制しなくなることが考えられる。その結果、予想とは逆に、潜在的ホモフォビアが低く平等主義規範意識の強い者において、男性役割規範の促進効果が顕著にあらわれたのだと考えられる。

いずれにせよ、この解釈については推測の域を出ないため、今後さらなる検討が必要である。

潜在的ホモフォビアが高い場合 潜在的ホモフォビアが高い場合、仮説によれば、平等主義規範意識が高い群において抑制過程でより大きな葛藤が生じるため、正当化過程がより強く生起して男性役割規範による促進効果がみられるはずであった。しかし本研究では、反対に平等主義規範意識が低い群において男性役割規範の促進効果がみられた。これは、仮説 1-2 “平等主義規範意識が弱いと、潜在的ホモフォビアが抑制されずに、男性役割規範によってホモフォビアの表出が促進されやすくなる。”と一部符合する結果であるといえる。平等主義規範意識が高い場合には男性役割規範の促進効果がみられないことから、潜在的ホモフォビア高群においては正当化・抑制モデルの理論仮説に沿ったホモフォビアの表出が行われていた可能性が考えられる。しかしこのことは、潜在的ホモフォビアが高い群においては、平等主義規範意識が高い場合、抑制の際にあまり葛藤が生じていないことを示唆している。なぜ当初予想していた仮説とは逆の結果が得られたのかについては、潜在的ホモフォビアが低い場合と同様に、その偏見形成過程と昨今の同性愛に寛容な社会的風潮によって説明することが可能である。

上述したように、個人が抱く潜在的偏見は、幼少時の養育環境や教育、友人仲間と共有している規範に影響をうけて形成されることが考えられる。このことから潜在的ホモフォビアが高い者は、幼少の頃に反同性愛的な情報に接することが多かった可能性がある。しかしそれは言い換えれば、同性愛者に関する情報に触れる機会が多く、自身や周囲が抱くホモフォビアについてより意識的であることを示している。特に、潜在的ホモフォビアが高く平等主義規範意識も高い人は、同性愛者に対する否定的イメージや情報だけでなく、昨今の同性愛者に寛容な社会的風潮も認識しているであろうことが考えられる。そのため、平等主義規範意識が高い場合は自身のホモフォビアの表出が社会的には望まれていないことを自覚しており、非常に慎重に自身のホモフォビアの表出を抑制し、結果として男性役割規範による正当化がなされなかったと考えられる。しかし平等主義規範意識が低い場合は同性愛者に対して平等に接しなければならないという意識が低いため、ホモフォビア表出を抑制する際に生じる葛藤が少なく、容易に男性役割規範によって正当化され表出されたと考えられる。

ゲイに対する偏見表出

本研究では、女性のゲイに対する偏見の表出過程においては、上述したようなレズビアンに対する偏見においてみられた調整効果は示されなかった。このことは、女性の場合、ゲイに対

しては正当化・抑制モデルに沿った偏見表出過程が生起していないことを示している。すなわち、女性においてはゲイに対する偏見を抑制する際に生じる葛藤を解消するために、偏見を正当化するという心的過程が認められなかったことになる。このことは、以下のように説明することが可能である。

女性は、概してゲイに対して友好的態度を示し (Bartlett, Patterson, VanderLaan, & Vasey, 2009; 加藤, 2009)、かつ自分を性的対象としてみず、女性同士特有の煩わしさ抜きでかわりを持てる存在として好意的に認識している (加藤, 2009)。そのため、自身がゲイに対して偏見を抱いているといった意識がレズビアンに対する場合に比べて少なく、ゲイに対する偏見を抑制しなければならないというプレッシャーが弱かったことが考えられる。したがって、偏見表出を抑制する際に生じる葛藤が少なく、男性役割規範が正当化要因としては生起せずに調整効果がみられなかったことが考えられる。実際の顕在的偏見ではレズビアンよりゲイの方が高い得点が示されたが ($t(44) = 7.34, p < .001$)、このことも、自身がゲイに対して好意的な感情を抱いているという意識から、ゲイに対して偏見を持っているという自覚が弱く、そのためあまり平等主義規範による抑制がなされなかった結果であるといえよう。しかし本研究では葛藤の程度を直接測定していないため、今後、抑制の際にどの程度葛藤を感じているのか検討する必要がある。

本研究の限界と意義

本研究では、仮説は支持されなかったものの、2つの研究目的は達成されたといえる。第1に、同性愛者に対する偏見表出における平等主義規範および男性役割規範の調整効果について検討を行うことにより、概念モデルのレベルに止まっていた正当化・抑制モデルについて、実証的に検討する道筋をつけることができた点である。各要因間の因果関係を明確に特定することはできないが、抑制の際に生じる葛藤の程度がその後の正当化過程の生起に関わっている可能性が示された。つまり、仮説が支持されなかった理由の一つに葛藤の生起状況を確認していないことが考えられる。そのため、差別の正当化・抑制モデルを用いて偏見表出を検討する際は葛藤の程度についても考慮する必要があるだろう。第2に、同性愛者に対する偏見表出は、男性と女性で異なる心的過程が生起していることが明らかになった点である。男性においては平等主義規範が抑制要因として作用しておらず、正当化・抑制モデルに沿ったホモフォビア表出がなされていないが、女性においては平等主義規範がゲイ・レズビアン両者に対する偏見の抑制要因として作用しており、またレズビアンに対する偏見表出においては、正当化・抑制モデルに沿った偏見表出過程が生起している可能性が示された。

しかし、本研究には以下に挙げる2つの課題が残された。1つ目は、男性におけるホモフォビアの抑制要因を特定することである。本研究において調整効果がみられなかったのは、男性では抑制要因として作用しない平等主義規範を抑制要因として採用したことが原因であるの

か、それとも男性は、他者からの期待や公的状況といったような外的要因が、ホモフォビアの抑制要因となるのか、検討する必要がある。そして2つ目は、抑制の際に参加者が感じた葛藤の内容と程度を測定することである。正当化・抑制モデルでは、正当化の過程は抑制過程における葛藤によって生じるとされており、この葛藤の程度と、その後生起する正当化要因の強度との関連を検討することは必要だと考えられる。本研究では質問紙などで参加者が経験している種々の葛藤について回答してもらっていないため、今後の研究ではそれらを測定する必要があるだろう。

【注】

1) 男性役割規範尺度の使用については、原著者である Levant 教授から許諾を得たが、その際、許諾の条件として日本語版の作成において、Brislin (1970) のバックトランスレーションの方法を用いるよう求められた。そのため本研究では、Brislin (1970) に倣い、7人のバイリンガルと2人のネイティブスピーカー、5人の日本語話者に協力してもらい、和訳版男性役割規範尺度を作成した。バックトランスレーションの手続きは、以下の通りであった。1) 実験の目的などを知らない、日本語と英語のバイリンガル1名が、オリジナル英語版男性役割規範尺度の和訳を行った。2) ステップ1とは別の、実験の目的などを知らない日本語と英語のバイリンガル1名が、和訳版男性役割規範尺度を英訳し、バックトランスレーション版男性役割規範尺度を作成した。3) ステップ1、2とは別の有能な英語と日本語のバイリンガル2名がオリジナル英語版と日本語訳の内容を比較し、意味的間違いなどを指摘した。また英語を母国語とする人物2名がオリジナル英語版とバックトランスレーション版の内容を比較し、意味的間違いなどを指摘した。4) ステップ3の4名からの指摘を踏まえ、男性役割規範尺度の和訳に修正を行った。日本語を母国語とする学生5名が、修正版和訳の内容について、不自然な箇所、わかりにくい箇所を指摘した。5) 実験の目的などを知らない、新たな別の日本語と英語のバイリンガル1名が、ステップ4の指摘を受けてさらに修正した日本語訳のバックトランスレーションを行った。6) 英語が堪能な新たなバイリンガル2名が、ステップ5で作成されたバックトランスレーション版とオリジナル英語版の内容を比較し、意味的間違いなどを指摘した。7) ステップ6の指摘を受け、再度日本語版男性役割規範尺度の内容に修正を行い、これを和訳版男性役割規範尺度短縮版（男性役割規範尺度）として実験に用いた。

【引用文献】

- Allport, G. W. 1954. *The nature of prejudice*. Cambridge, MA: Addison-Wesley.
- (オルポート, G.W. 原谷達夫・野村昭 (翻訳) 1968. I 選択的思考 偏見の心理 培風館 pp.5-6.)
- Biernat, M., Vescio, T. K., & Theno, S. A. 1996. Violating American values: A "value congruence" approach to understanding outgroup attitudes. *Journal of Experimental Social Psychology*, **32** (4), 387-410.
- Banase, R., Seise, J. & Zerbes, N. 2001. Implicit attitudes towards homosexuality: Reliability, validity, and controllability of the IAT. *Zeitschrift für Experimentelle Psychologie*, **48** (2), 145-160.
- Bartlett, N. H., Patterson, H. M., VanderLaan, D. P., & Vasey, P. L. 2009. The relation between women's body esteem and friendships with gay men. *Body Image*, **6** (3), 235-241.
- Brislin, R. W. 1970. Back-Translation for cross-cultural research. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, **1** (3), 185-216.
- Craig, S. C., Martinez, M. D., Kane, J. G., & Gainous, J. 2005. Core values, value conflict, and citizen's ambivalence about gay rights. *Political Research Quarterly*, **58** (1), 5-17.
- Crandall, C. S., & Eshleman, A. 2003. A justification-suppression model of the expression and experience

- of prejudice. *Psychological Bulletin*, **129** (3), 414-446.
- Crandall, C. S., & Eshleman, A. 2005. The justification-suppression model of prejudice: An approach to the history of prejudice research. In Crandall, C. S. & Schaller, M. (Eds.), *Social psychology of prejudice: historical and contemporary issues* (pp. 237-268). Lawrence, Kan.: Lewinian Press.
- Devine, P. G. 1989. Stereotypes and prejudice: Their automatic and controlled components. *Journal of Personality and Social Psychology*, **56**, 5-18.
- Falomir-Pitchastor, J. M., & Mugny, G. 2009. "I'm not gay...I'm a real man!": Heterosexual men's gender self-esteem and sexual prejudice. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **35** (9), 1233-1243.
- Feldman, M. B., & Meyer, I. H. 2007. Eating disorders in diverse lesbian, gay, and bisexual populations. *International Journal of Eating Disorders*, **40** (3), 218-226.
- Freeman, J. B., Johnson, K. L., Ambady, N., & Rule, N. O. 2010. Sexual orientation perception involves gendered facial cues. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **36** (10), 1318-1331.
- Gabriel, U., Banse, R., & Hug, F. 2007. Predicting private and public helping behavior by implicit attitudes and the motivation to control prejudiced reactions. *British Journal of Social Psychology*, **46**, 365-382.
- Gonsiorek, J. C. 1988. Mental health issues of gay and lesbian adolescents. *Journal of Adolescent Health Care*, **9** (2), 114-122.
- Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. 1998. Measuring individual differences in implicit cognition: The implicit association test. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74** (6), 1464-1480.
- Gruskin, E. P., Hart, S., Gordon, N., & Ackerson, L. 2001. Patterns of cigarette smoking and alcohol use among lesbians and bisexual women enrolled in a large health maintenance organization. *American Journal of Public Health*, **91** (6), 976-979.
- 土肥伊都子・廣川空美・水澤慶緒里 2008. 共同性－作動性尺度の構成概念妥当性の検討: A test of construct validity of Communion-Agency Scale (CAS) 人文科学・自然科学, **49**, 1-16.
- 林真一郎 2002. 男性役割規範尺度日本語版 (JMRNI) の作成 上智大学心理学年報, **26**, 135-144.
- Herek, G. M. 2002. Gender gaps in public opinion about lesbians and gay men. *Public Opinion Quarterly*, **66** (1), 40-66.
- Herek, G. M. 1998. The attitudes toward lesbians and gay men (ATLG) scale. In C.M. Davis, W.H. Yarber, R. Bauserman, G. Schreer, & S.L. Davis (Eds.), *Sexuality-related measures: A compendium*. Thousand Oaks, CA: Sage Publications.
- 日高康晴 2007. 社会調査から見た性的指向と健康問題 女性学評論, **21**, 49-66.
- Hooghe, M. 2011. The impact of gendered friendship patterns on the prevalent of homophobia among Belgian late adolescents. *Archives of Sexual Rickets Behavior*, **40** (3), 543-550.
- 石原英樹 2013. 日本における同性愛に対する寛容性の拡大－「世界価値観調査」から探るメカニズム－ 相関社会科学, **22**, 23-41.
- 加藤悠二 2009. ゲイ男性と親交を持つヘテロセクシュアル女性へのインタビュー調査 CGSジャーナル ジェンダー&セクシュアリティ, **4**, 61-72.
- Katz, I., & Hass, R. G. 1988. Racial ambivalence and American value conflict: Correlational and priming studies of dual cognitive structures. *Journal of Personality and Social Psychology*, **55**, 893-905.
- 風間孝・河口和也 2010. 同性愛と異性愛 岩波新書.
- Levant, R. F., & Fischer, J. 1996. The male role norms inventory. In C. M. Davis, W. H. Yarber, R. Bauserman, G. Schreer & S.H.L. Davis (Eds.), *Sexuality related measures: A comparison* (2nd Ed.). Sage Publications.
- Levant, R. F., Hall, R. J., & Rankin, T. J. 2013. Male role norms inventory-short form (MRNI-SF) : development, confirmatory factor analytic investigation of structure, and measurement invariance across gender. *Journal of Counseling Psychology*, **60** (2), 228-238.
- Lingiardi, V., Falanga, S., & D'Augelli, A. R. 2005. The evaluation of homophobia in an Italian sample. *Archives of Sexual Behavior*, **34**, 81-93.
- 日本経済新聞 2015. 「同性婚」に証明書 東京・渋谷区、全国初の条例成立 2015年3月31日 <<http://>

- www.nikkei.com/article/DGXLASDG31H7P_R30C15A3CZ8000/> (2015年10月17日)
- Nosek, B. A., Smyth, F. L., Hansen, J. J., Devos, T., Lindner, N. M., Ranganath, K. A., Smith, C. T., Olson, K. R., Chugh, D., Greenwald, A. G., & Banaji, M. R. 2007. Pervasiveness and correlates of implicit attitudes and stereotypes. *European Review of Social Psychology*, **18**, 36-88.
- Rohner, J. C., & Bjorklund, F. 2006. Do self-presentation concerns moderate the relationship between implicit and explicit homonegativity measures?. *Scandinavian Journal of Psychology*, **47**, 379-385.
- Russell, C. J., & Keel, P. K. 2002. Homosexuality as a specific risk factor for eating disorders in men. *International Journal of Eating Disorders*, **31** (3), 300-306.
- 産経WEST 2015. 宝塚市議会 性的少数者支援の条例検討めぐり紛糾 市長が発言取り消し求め… 「不適切」との指摘も 2015年6月25日 <<http://www.sankei.com/west/news/150625/wst1506250014-n1.html>> (2015年8月20日)
- 清水裕士・村山綾・大坊郁夫 2006. 集団コミュニケーションにおける相互依存性の分析(1) コミュニケーションデータへの階層的データ分析の適用 電子情報通信学会技術研究報告, **106** (146), 1-6.
- Smith, S. J., Zanotti, D. C., Axelton, A. M., & Saucier, D. A., 2011. Individual's Beliefs about the Etiology of Same-Sex Sexual Orientation. *Journal of Homosexuality*, **58** (8), 1110-1131.
- 杉山貴士 2006. 性的違和を抱える高校生の自己形成過程：学校文化の持つジェンダー規範・同性愛嫌悪再生産の視点から 技術マネジメント研究, **5**, 67-79.
- 和田実 2008. 同性愛に対する態度の性差：同性愛についての知識、同性愛者との接触、およびジェンダー・タイプとの関連 思春期学, **26** (3), 322-334.

【2015年9月8日受付, 11月5日受理】

Investigating the effect of Egalitarianism and Male role Norms on prejudices toward homosexuals : Justification and Suppression Model of prejudice

Nahoko Adachi, Tomoko Ikegami

This study investigated heterosexual male and female expressions demonstrating prejudice toward homosexuals from the perspective of the Justification-Suppression Model (JSM) of Prejudice. According to JSM, people initially suppress their implicit prejudices, but this suppression effect is moderated at the next stage of the justification process, resulting in the expression of explicit prejudices. Values and beliefs associated with the reduction of prejudices are regarded as suppression factors, while those associated with the enhancement of prejudices are justification factors under JSM. We employed Egalitarianism as a suppressor and Male Role Norms as a justifier of homophobia and investigated how these of the two factors moderate the relation between implicit and explicit attitudes toward homosexuals. Results revealed that Male Role Norms enhanced prejudices among both males and females, while Egalitarianism suppressed prejudices only among females. Moreover, a justificatory effect of Male Role Norms, arising in response to the suppressive effect of Egalitarianism was found, but only for females' explicit expressions of prejudice toward lesbians. Thus, expression of prejudice toward homosexuals along with JSM is more likely to occur among females than males.